

障害を持つ子どもの家族に対する援助の方法について

分担研究 学童期の旅育のあり方

研究協力者 松木健一

要約

深刻な家庭環境の中に置かれ、保護者からの保護を十分に期待できない障害児の場合、直接子どもに援助する必要がある。この場合、どの次元での援助を行うか、対人関係・自己形成のどの段階にかかわるかが問題になる。ここでは、かかわる内容に関し、3段階の水準を想定し、各段階でのかかわり方について述べた。

1 深刻な家庭環境に置かれた障害児への援助

障害を持つ子どもたちは、必ずしも恵まれた家族環境の中で生れてくる者ばかりでなく、深刻な家庭環境を抱えて誕生しなければならない者もいる。望まれず生れてきた者。虐待をおこしやすい父親を持つ者。薬物依存の母親や育児拒否をする母親を持つ者など、保護者に対する援助が必要な場合が多々ある。

このような場合、子どもたちは自身の障害に加えて、保護者から絶対的に受容されることで構築される他者との人間関係に重大なハンディを負うことになる。また、障害が軽度の子どもの場合でも、コミュニケーションや対人関係の構築に思わしい発達を見せにくくなることもある。

また、保護者に対する直接的な援助が困難な場合も多く、その場合は、制限された時間内でしかないが、直接子どもたちにかかわり、援助していかなければならないこともある。また、周囲から家庭全体を支えるための取り組みをしなければならないこともある。

ここでは、劣悪な家庭環境に置かれた障害児で、かつ、保護者に対する援助が困難である場合の障害児に対して、どのような援助が可能であるのかについて検討したい。

2 どの次元での援助を行うか

保護者に対しての直接的な援助が困難な場合、その家庭に介入しようとする援助者は、保護者との関係を取りつつ、直接子どもとかかわることと、その家庭を囲む地域の援助ネットワークを構築することに専念することになる。こ

の場合、直接子どもにかかわることから、地域環境の整備までには様々な次元での取り組みが考えられる。吉武(1999)は、多水準の介入を想定し、個人に介入する次元、家族や学校に介入する次元(ミクロシステム)、学校と家族を同時に介入する次元(メゾシステム)、学校やその上部組織の教育委員会あるいは児童相談所などの組織に介入する次元(エクソシステム)、時代精神や価値観などにはたらきかける次元(マクロシステム)を想定しており、マクロシステムを除く、上部組織になるほどコンサルテーションの必要が生れてくると述べている。

援助をしようとする者は、このようなどの次元にはたらきかけようとしているのか、そして、どの次元への援助・介入は誰にゆだねようと考えているのかを明確に意識する必要がある。

3 どのような事柄に介入するのか

子どもと直接かかわりながら、他者との関係の構築や自己の形成を援助しようとする場合、その子が幼児なのか、小学生なのか、中学生なのかによってもかかわる内容が異なるであろう。また、家族環境やその子の障害の程度によっても、かかわる内容が異なってくる。

子どもが他者から絶対的に受容され、対人関係を構築すると共に自己を確立していく成長過程には、いくつかの段階を踏んで進んで行くことが考えられる。そして、どの段階での戸惑いを子どもが示しているのかによっても援助の仕方が異なってくるように思われる。

ここでは、子どもの成長にそくして3つの介入の水準を設けた。各段階での取り組みについて以下に述べる。

時間・空間の共有水準への介入

子どもが他者に信頼を寄せ、自己の行動に有能感を持ち、自信を持った行動を展開していくためには、常に他者に見守られている感覚を味わうことが大切である。そういった感覚を持てるように援助するためには、まずは、一緒にいる時間を多く取り、子どもの行う行為に対して共振していくこと、共鳴していくこと。共に過し同じことをしながら、時間と空間を共有していくことが必要である。

こういった時間と空間を共有する中で、象徴的なのは、食事を共にすることであろう。共に食事を作り、共に食する。この食事を通して、子どもが外界を飲み込む象徴的儀式に立ち会い促していくことができる。

関心の共有水準への介入

時間と空間を共にしながら、次第に関心を共有することができるようになる。関心は、現時点における心の向きであるが、それは、過去における経験の省察と、未来に向けて企投でもある。未来を描くことができ、そこに向けて心を開く行為でもある。

外界の事象に関心を持つことができるためには、重要な他者、あるいは、時間と空間を共有してきた人物と出来事を共有すること。出来事を共有しながら、共に出来事の展開を構想していく。そういった中で関心を共有することが生れてくるように思われる。

出来事を共有していく中では、他者が自己に合わせてくれること、他者があわせやすいように自己を持っていくこと、他者に自己を合わせることなどの関係が生まれてくる。

また、関心を共有することは、遂行を共有すること、遂行結果の表現を共有すること(活動を成し遂げたときの「ヤッタ!」の叫びを共有すること)が伴うことでもある。

創造的行為の共有水準への介入

出来事の共有の中で活動が展開してくると、その活動がすぐれた活動であればあるほど、活動はさらに大きな活動、意味ある活動へと発展することを求める内在的引力を秘めている。そういった中で創造的行為を共有することが見られるようになる。

創造的行為を共有する中では、他者の能力を認め、同時に、自己の能力をも認識しなければならない場面に遭遇する。そして、自他の能力を認識することは、活動の中で自己および他者がどのような社会的・集団的役割を担っていくかを問う行為に繋がっていく。

また、創造的行為の共有は、思想の共有でもあり、同志的関係を生み出すことにもなる。

4 介入によってどのような変化を生み出すことができるか

各水準への介入によって、子どもたちには、様々な変化が見られるようになる。各水準に即して、特徴的な変化をあげると次のようになる。

時間・空間の共有水準での介入では、子ども自身が現生活を肯定的に見ることが見られるようになる。家族の者に元気に話しかけるといったことが見られるようになり、家族自体のダイナミズムを変化させることができる場合がある。

関心の共有水準では、社会的に好ましいと思われる行為を子どもが行い、他者から賞賛を得られることを否としない様子が見られるようになる。家族に対しては、家族が喜んでくれそうなことを実行してみようというように見られるようになる。

創造的行為の共有水準では、家族のことを他者に向かって語り、自己の歩みを肯定的に再構造化することが見られる。何度か、家族のことを語りながら、自らを構築していく様子を見ることが出来る。

5 各水準でのかわりが豪族の捉え直しをもたらす

子どもが、自らの家庭環境を見詰め直すことで、家族から独立して自己を形成することができるようになると思われるが、深刻な状況に置かれた子どもの場合、得てして家族を否定し、家族のことを心の奥に押し込めることで、現実に対処していこうとすることがある。しかし、そういった方略は、たえず、自己の奥底からの叫びに脅えさせられることにもなる。

しかし、子どもの成長に合わせて各水準でのかわりをするすることで、家族のことを話題にすることができるようになる。そして、傷つくことが多い中で、家族の中にある微妙ではあるが、

意味あることを見つけ、それを繋げて家族の全体像を再構成することができる。家族を語り直しするわけである。

子どもは、その時どきの成長の中で、自己の過去を語り直すことで作り直し、自らに語りながらアイデンティティを形成していくことができる。

6 おわりに

本論では、深刻な家庭環境にある障害児が対人関係を構築し、自己を確立していくための過程について概括してきた。本来、事例をあげて説明すべきところを省略した。今後、事例をあげて考察していきたい。